

海の生きもの観察ノート ⑥

# イノギンチャクを 観察しよう

千葉県立中央博物館分館  
海の博物館

# はじめに

イソギンチャクというと、磯の生きものの中でもよく目につく生きものの一つですが、磯の岩の割れ目ですぼまった姿が地味なせい、観察会などでも今ひとつ人気がありません。また、研究もあまり進んでおらず、磯でふつうに見られるイソギンチャクでも、名前が付いていなかったり、分類が混乱していたりすることが少なくありません。

本書では、イソギンチャクの美しく、多様な姿形を写真を交えて紹介しています。また、千葉県沿岸で見られる多くの種を掲載しており、観察時に名前を調べる手助けとなると思います。本書を手、より多くの方にイソギンチャクを観察し、興味を持っていただければ幸いです。また、イソギンチャクという生きものに注目することによって、海には、イソギンチャク同様、普段は注目もされない多くの生きものがいること、そしてそのような生きものたちの暮らしに思いを馳せ、それら全てが自分にとって大切な存在であるように思えてくる・・・ もしそんなことがあれば望外の喜びです。

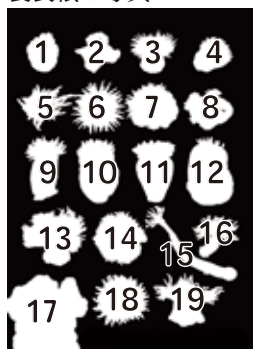
## 目次

はじめに	2
イソギンチャクは何の仲間?	3
イソギンチャクの体のつくり	4
イソギンチャクの一生	5
分裂するイソギンチャク	5
千葉県のイソギンチャク図鑑	6
参考図書	31

表紙の写真

ウスアカイソギンチャク(鴨川市磯村沖 水深 20 m)

裏表紙の写真



- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 1 ウスアカイソギンチャク    | 11 不明種4 (p.27)    |
| 2 ベニヒモイソギンチャク    | 12 クロガネイソギンチャク    |
| 3 ヤドカリイソギンチャク    | 13 キッカイソギンチャク     |
| 4 ミナミウメボシイソギンチャク | 14 ニチリンイソギンチャク    |
| 5 スナイソギンチャク      | 15 ムシモドキギンチャク     |
| 6 ウメボシイソギンチャク    | 16 不明種1 (p.26)    |
| 7 ヒダベリイソギンチャク    | 17 ナスビイソギンチャク     |
| 8 コモチイソギンチャク     | 18 イワホリイソギンチャクの仲間 |
| 9 ミドリイソギンチャク     | 19 ウスアカイソギンチャク    |
| 10 ヒオドシイソギンチャク   |                   |

# イソギンチャクは何の仲間?

イソギンチャクは、刺胞動物(または腔腸動物)と呼ばれるグループの一員であり、れっきとした動物です。このグループには他に、クラゲの仲間や、ヒドラの仲間、サンゴ礁を形づくる主要な生物であるイシサンゴの仲間などが含まれます。これらの中でも、イソギンチャクはイシサンゴやスナギンチャクの仲間に近縁であると考えられています。イシサンゴの仲間は、石灰質の骨格を持っていますが、体



の基本構造はイソギンチャクと極めてよく似ています。刺胞動物の仲間は、遊泳生活をおくったり、多くの個体が集まって群体を形成したりするものなど、さまざまな生活、形を持っていますが、イソギンチャクは全て固着生活をおくり、群体を形成することなく単独で生活しています。

刺胞動物は、刺細胞という細胞内に刺胞と呼ばれるカプセル状の構造物を持っています。刺胞はさまざまな刺激に反応して中身を発射し、餌や外敵などに刺さったり絡みついたりします。この際、内部に入っている毒液が注入され、相手を殺したり、その動きを麻痺させたりします。刺胞は約0.01 ~ 0.1 ミリメートル非常に小さく、多くの場合人に害を及ぼすことはありませんが、大きな刺胞を持つ種類など、人間を死に至らしめるものも存在します。刺胞は触手のみにあると考えられがちですが、実は刺胞にはさまざまな種類があり、これらは体の各部に配置され、それぞれが異なった機能と持っていると考えられています。

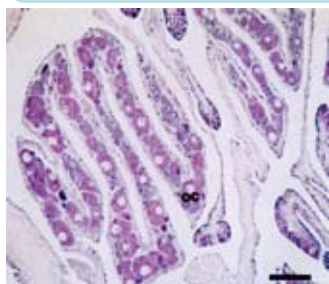
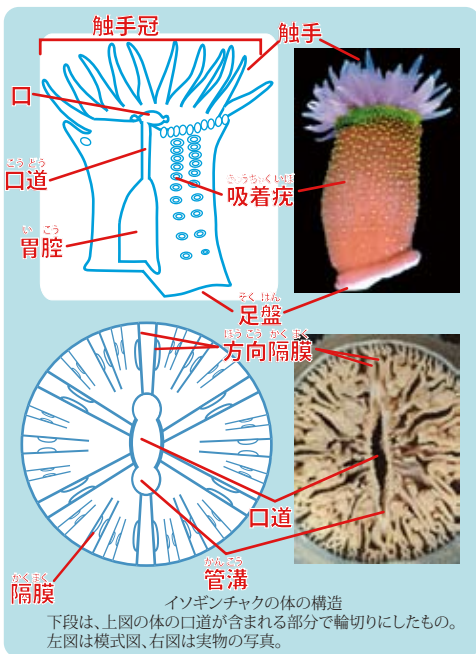


イワホリイソギンチャクの仲間の触手に含まれる刺胞(左:発射前, 右:発射後;カプセルの長さは約0.1ミリメートル)

# イソギンチャクの体のつくり

イソギンチャクの体を外から見ると、一見単純な構造に見えます。餌をとるための触手が上面に配列し、その中央に口が開いています。触手からめとられた餌は、口から続く口道（くちど）を運ばれ、胃腔（いそう）へと達します。ここで消化された後、再び口道を通り、口から排泄されます。体の下部は、多くの種類では足盤（あしばん）と呼ばれる吸盤状の構造になっており、ここで岩などの基質にしっかりと付着しています。このため、イソギンチャク類の多くは、剥がそうと思ってもなかなか簡単には剥がれません。

イソギンチャクの体の内部は、外見に比べ複雑な構造をしています。体内は、隔膜（かくまく）と呼ばれる膜によって規則正しく仕切られています。初めに6対、次にそれらの間に6対、さらに間に12対というように追加されていき、24対または48対程度の枚数を持つものが一般的です。隔膜に生殖巣・体を縦に縮める牽引筋・消化活動を担う隔膜糸（かくまくし）など、生活していく上で重要な、さまざまな役割を担う部分が収められています。

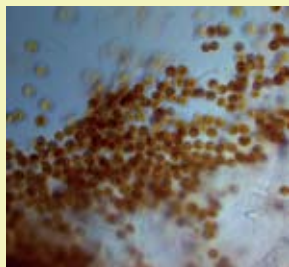


イシワケイソギンチャクのメスの生殖巣の組織切片像。赤や紫色の楕円形のもものが卵の元になる細胞で、これらは隔膜の中で発達します。

\* 右下黒線は0.2 mm。

## 褐虫藻を持つイソギンチャク

イソギンチャクの中には、サンゴ礁をかたちづくる造礁サンゴと同様、体内に褐虫藻とよばれる単細胞の渦鞭毛藻の仲間を持ち、その光合成産物を栄養として利用している種類があります。褐虫藻は、触手や体壁などの部分の内側の細胞層（胃層）に大量に含まれています。房総半島の磯では、ヒメイソギンチャク、ヨロイイソギンチャク、ベリルイソギンチャク、サンゴイソギンチャクなど（図鑑参照）が褐虫藻を持つイソギンチャクで、いずれの種類も褐虫藻のおかげで触手が茶色っぽく見えます。

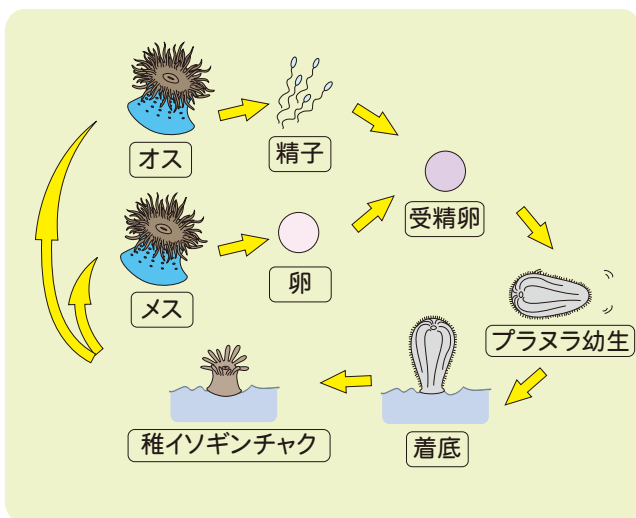


サンゴイソギンチャクの触手中の褐虫藻。茶色い丸いつぶつぶが褐虫藻（直径約0.01 mm）。



# イソギンチャクの一生

ほとんどのイソギンチャクには雄と雌の区別があり、それぞれ精子と卵を体内で生産します。この精子と卵が受精してこどもをつくり、子孫を残すことを有性生殖といいます。イソギンチャクの受精は、体外で行われることも体内のこともあります。受精した卵は、プラナラ幼生と呼ばれる幼生になります。



多くのイソギンチャクの場合、プラナラ幼生は海中を浮遊したのち、岩などの好みの場所に着底し、その後、触手が生えて稚イソギンチャクとなります。

## ぶんれつ 分裂するイソギンチャク

イソギンチャクには、有性生殖ではなく、無性生殖を行う種類もあります。縦分裂は、イソギンチャクの無性生殖の方法の一つで、足盤が相反する二方向に移動することによって、最終的に体を2つに引き裂いてしまうという少し乱暴な方法です。千葉県の大磯では、ヒメイソギンチャクやミナミウメボシイソギンチャクなどが、盛んに縦分裂を行って増える種類です。運が良ければ磯でそのような姿を観察できるかもしれません。



縦分裂して2個体に分かれようとしているヒメドシイソギンチャク。上図は上から見たところ、下図は付着したガラス面越しに下から見たところ。

# 千葉県のエソギンチャク図鑑

## 図鑑の見方

### エソギンチャクの名前

アオホシエソギンチャク …… 和名  
 (ウメボシエソギンチャク科) …… (科名)  
*Anthopleura atodai* Yanagi & Daly, 2004 …… 種名\*  
 属名 種小名 命名者 命名された年  
 (Actiniidae) …… (科名)

\*学術的に用いられる種名(種の学名)です。種名は属名と種小名との組み合わせで表され、表記には斜体を用います。種名の後ろには、この種が論文等で発表された年とその著者名が記されます。

### エソギンチャクの特徴

大 き さ： エソギンチャクは体の大きさが一定しないので、おおよその目安です。計測 部分は次の3つのうち、利用しやすいものを選んであります。①足盤径(足 盤の直径)、②触手環径(触手が十分に開いたときの触手環の直径)、③体 長(体が伸長したときの先端から末端までの長さ)。

特 徴： 主に外見的特徴等を可能な限り記しています。

生 息 環 境： 主な生息場所・水深などを示しています。

そ の 他： その他の特筆すべき点などについて記してあります。

### 千葉県周辺での分布

赤丸●で示してある地点での標本記録があります。エソギンチャク類は外見での同定が困難なため、ここでは目視のみによる生息情報は含んでいません。このため、実際には分布していると思われる場所でも、印が付いていない場合があります。



### 図鑑の利用上の注意

日本のエソギンチャク類の分類に関する学術的知見は非常に乏しく、図鑑などでなじみのある種類であっても、正式な学名がついていない、あるいは確かめられていないことが少なくありません。本書では、このように今後、分類学的研究が必要と考えられる種については、下記のような表現を用いています。

- 1)「種名+sensu ○○ 19XX」と表記されている場合  
 「○○という人が 19xx年の出版物中でこの種名を用いて指し示した種」ということを意味します。○○さんが扱った種類は、本来の種名で示された種とは異なる可能性があるかと判断される場合などに用います。
- 2)属名の後ろに“sp.”と表記されている場合  
 「その属の1種(species)」という意味で、属までは判明したが、現時点ではその属のどの種であるかわからないことを示します。既知種であるが詳しく調べられていない場合と、未記載種である場合の二通りのケースがあります。和名については○○の仲間などのように表記しています。
- 3)「不明種」と表記されている場合  
 現時点では、執筆者が同定作業を行っておらず、どのようなグループに属するかも不明であることを意味します。多くの場合、これらは未記載種であると考えられます。

なお、本書は学術利用を目的に作成されたものではありません。学名の安易な転記は分類学的混乱を生じさせる原因となるので注意が必要です。また本書には、野外観察の助けになるように、千葉県において従来分布記録がなかった種も含め、できる限り多くの種が掲載されていますが、紙面の都合上掲載されていない種も多くあります。

## カワリギンチャク

(カワリギンチャク科)

*Halicurias carlgreni* McMurrich, 1901

(Halcuriidae)



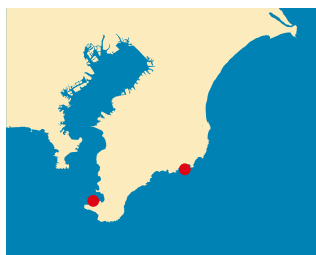
- 大 き さ： 足盤径約 15 mm  
特 徴： 口の周囲が蛍光の黄色を呈する。触手は白く、体壁にはオレンジ色の斑紋がある。  
生息環境： 水深 30 m 以深の岩礁域。  
そ の 他： 比較的深いところに生息するので、なじみは薄い  
が、刺網漁などに混獲されることがある。カワリギンチャクの名は、隔膜配列が通常のエソギンチャクと異なることから付けられている。

## ムシモドキギンチャクのなかま

(ムシモドキギンチャク科)

*Edwardsioides* sp.

(Edwardsiidae)



- 大 き さ： 体長約 5 cm  
特 徴： 体は著しく伸長し細長い。隔膜が8枚しかないため体壁に8本の筋が確認できる。  
生息環境： 水深 5 m 程度の岩礁域で、基盤の岩に砂が堆積したような場所に生息している。通常触手冠のみが砂底上に開き、本体は砂中に潜っている。  
そ の 他： 昼間は触手を開かないのか、見つけるのは比較的難しいが、砂を掘っていると縮こまった姿を見つけることができる。

## ナスビイソギンチャク

(ナガイソギンチャク科)

*Halcampella maxima* Hertwig, 1888

(Halcampoididae)



大 き さ： 体長約 15 cm

特 徴： 細長い体をしており、体壁は茶色い皮膜で覆われる。触手は紅色からオレンジ色。

生息環境： 水深 40 - 180 m の砂泥底に生息する。刺網

その他： 漁などに混獲されることがある。飼育下では夜間に触手を開く。自然下では体の大半は砂泥に埋まっているものと思われる。



## キノコギンチャク

(コンボウイソギンチャク科)

*Anemonactis mazeli* ( Jourdan, 1880 )

(Haloclavidae)



大 き さ： 体長約 7 cm

特 徴： 触手はこん棒状で先端が球状になる。管溝が一つしかない。外側の触手が内側の触手より長い。体の下端は足盤とならず、基質に固着しない。

生息環境： 水深 20 m 前後の岩礁域で、岩の割れ目に砂が溜まったような場所にもぐっている。

その他： 房総半島周辺では発見例は少ない。地中海産の種の学名が充てられているが、奔放に産するものは別種の可能性が高く現在検討が進められている。





## ホウザワイソギンチャク

(ホウザワイソギンチャク科)

*Synadwakia hozawai* (Uchida, 1932)

(Andvakiidae)



大 き さ：触手冠径約 3 cm

特 徴：体は薄い灰褐色で、隔膜の部分が白く縦縞に見える。体は著しく伸長する。褐虫藻を持つ。

生息環境：内湾干潟の潮間帯。泥中深くの貝殻等に付着し、触手環を底質上に開く。

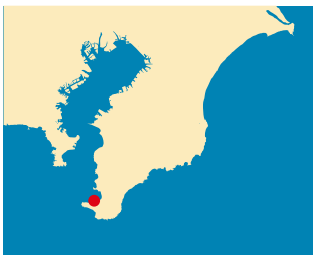
そ の 他：イシワケイソギンチャクにも似るが、本種の体の表面はなめらかでイボなどの突起物がないことから識別できる。

## カザリイソギンチャクの仲間

(カザリイソギンチャク科)

*Alicia* sp.

(Alicidae)



大 き さ：体長約 12 cm

特 徴：体には大型の刺胞が詰まった房状突起が無数にある。

生息環境：水深 20 m 前後の岩礁域。写真の個体は、海藻の上に付着している。

そ の 他：昼間は体を収縮させている。このグループのイソギンチャクには人を強く刺すものがあるが、本種が人に害を及ぼすかはどうかは不明。

## ウメボシイソギンチャク

(ウメボシイソギンチャク科)

*Actinia equina* Linnaeus, 1776

(Actiniidae)



大 き さ：足盤径約 3 cm

特 徴：触手は鮮やかな赤色を呈し、体はややくすんだ赤色。潮が引いて干出すると体を収縮させ、梅干しのように見える。

生息環境：岩礁域の潮間帯上部。岩棚下面などに密集して生息していることが多い。

そ の 他：おなかの中に小さなクローン個体を持つ。大西洋産の種と同種とされているが、今後の研究により別種となる可能性がある。



## ミナミウメボシイソギンチャク

(ウメボシイソギンチャク科)

*Anemonia erythraea sensu Uchida & Soyama, 2001*

(Actiniidae)



大 き さ：足盤径約 3 cm

特 徴：常に触手を掲げている。体はなめらかで、突起物はない。縦分裂でよく増える。

生息環境：岩礁域の潮間帯から水深 15 m 程度。潮間帯では転石の裏側などに付いていることが多い。

そ の 他：皮膚の弱い所などを刺されると痛みやかゆみを覚えることがある。色はオレンジ色や茶色、赤褐色、黒褐色など変異がある。



## ミドリイソギンチャク

(ウメボシイソギンチャク科)

*Anthopleura fuscoviridis* Carlgren, 1949

(Actiniidae)



大 き さ：足盤径約 4 cm

特 徴：特に体の上部に緑色のイボ(吸着疣)が多数あり美しい。体はよく伸長する。

生息環境：岩礁域の潮間帯から潮下帯。岩の割れ目奥深くに付着している。

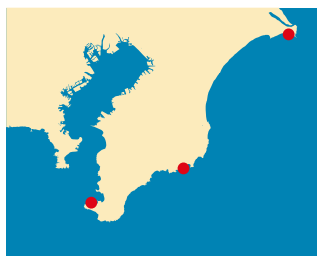
そ の 他：触手の色はピンクや黄緑、体の色は赤、黒など、変異があるが、吸着疣の色は常に緑色で安定している。

## ヒメイソギンチャク

(ウメボシイソギンチャク科)

*Anthopleura asiatica* Uchida & Muramatsu, 1958

(Actiniidae)



大 き さ：足盤径約 2 cm

特 徴：体に縦に規則正しく並んだ赤褐色の吸着疣がある。足盤付近に白く短い筋がある。縦分裂で増え、密な集団を作っていることが多い。褐虫

生息環境：藻を持つ。

そ の 他：岩礁域の潮間帯の日影になる岩棚の下面、転石の下などに生息している。  
体の色には深緑色から薄い緑褐色などの変異がある。

**ヨロイイソギンチャク**  
 (ウメボシイソギンチャク科)  
*Anthopleura uchidai* England, 1992  
 (Actiniidae)



- 大 き さ：足盤径約 3 cm  
 特 徴：体に吸着疣に小石や貝殻片を付けている。褐虫藻を持つ。  
 生息環境：岩礁域の潮間帯上部。比較的日の当たる岩の割れ目などに生息している。千葉県の大磯に最も普通。  
 そ の 他：触手の模様には変異がある。今後の研究によって学名が変わる可能性がある。

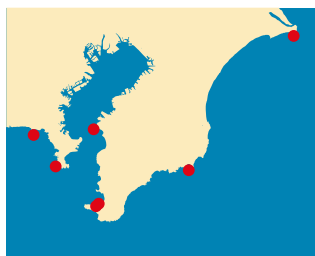


**ベリルイソギンチャク**  
 (ウメボシイソギンチャク科)

*Anthopleura inornata sensu* Uchida & Soyama, 2001  
 (Actiniidae)



- 大 き さ：足盤径約 5 cm  
 特 徴：前種に似ているが、千葉県周辺では、最外縁の触手の付け根にあるアクロラジという器官が、本種がクリーム色、前種が白色である。褐虫藻を持つ。  
 生息環境：岩礁域の潮間帯から潮下帯。ヨロイイソギンチャクに比べるとやや日影になる岩棚の側面にある割れ目などに生息している。  
 そ の 他：体の色はピンクや水色、紫色、緑褐色など変異が多い。



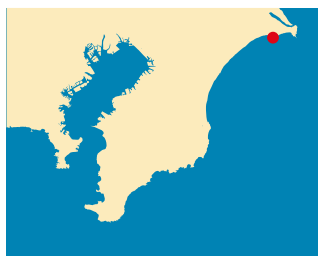


## クロガネイソギンチャク

(ウメボシイソギンチャク科)

*Anthopleura kurogane* Uchida & Muramatsu, 1958

(Actiniidae)



大 き さ：足盤径約 4 cm

特 徴：体壁に密に吸着疣が並び、貝殻片や小石などを付けている。体の色は灰褐色。

生息環境：波当たりの弱い岩礁や港湾などの潮間帯。岩の割れ目などに砂や泥の溜まったところに生息する。

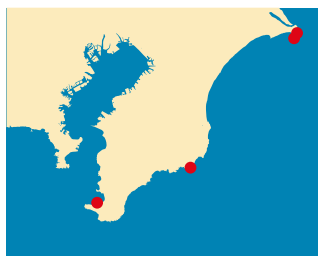
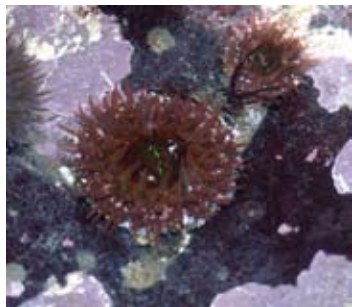
そ の 他：足盤の付着力が弱く剥がれやすい。北方系の種で、千葉県では飯岡以北に分布する。

## ヒオドシイソギンチャク

(ウメボシイソギンチャク科)

*Anthopleura pacifica* Uchida, 1938

(Actiniidae)



大 き さ：足盤径約 3 cm

特 徴：体は全体が赤褐色を呈する。吸着疣を持ち小石や貝殻片を付着させる。内側の触手内面、口のまわりが緑色を呈することが多い。

生息環境：岩礁域の潮間帯。岩の割れ目に砂がたまったところに生息する。

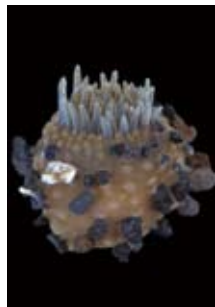
そ の 他：特に小型の個体は分裂してよく増える。大型の個体は分裂しないが、これを別種とする説もある。

## アオホシイソギンチャク

(ウメボシイソギンチャク科)

*Anthopleura atodai* Yanagi & Daly, 2004

(Actiniidae)

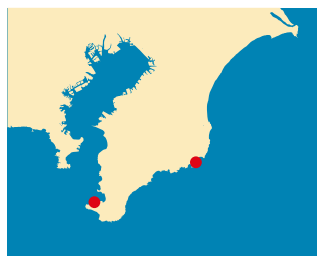


大 き さ：足盤径約 2 cm

特 徴：口の両端がコバルトブルーを呈する。吸着疣に貝殻片や小石を付着させる。褐虫藻を持つ。

生息環境：岩礁域の潮間帯上部。岩の表面や二枚貝の殻上に付着している。

そ の 他：足盤の付着力は弱く剥がれやすい。体の中に無性的に生産された幼体が入っている。体の色には変異がある。

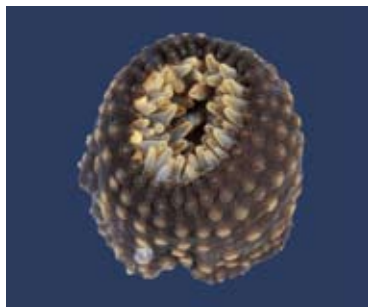


## ヨロイイソギンチャクの仲間

(ウメボシイソギンチャク科)

*Anthopleura* sp. cf. *nigrescens*

(Actiniidae)

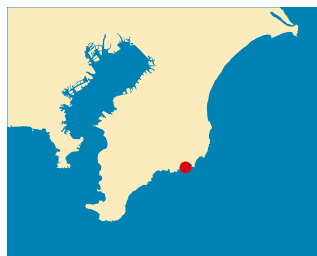


大 き さ：足盤径約 2 cm

特 徴：体の色は黒く、一面に比較的大きなイボ(吸着疣)が並ぶ。触手は灰褐色で一部赤みがかかる。

生息環境：流木などに非常に多くの個体が密に付着しているのが見つかることがある。千葉県では、磯に定着している個体は見つかっていない。

そ の 他：縦分裂によってよく増える。飼育下では頻繁に分裂を繰り返し繰り返す。おそらくハワイを模式産地とする種と同種と思われるが、研究は進んでいない。



## イシワケイソギンチャク

(ウメボシイソギンチャク科)

*Gyractis japonica sensu Uchida & Soyama, 2001*

(Actiniidae)



大 き さ：足盤径約 3 cm

特 徴：足盤は砂泥中深くにある貝殻編などに付着している。体は著しく伸長する。

生息環境：東京湾の各地の干潟、港湾などの潮間帯から潮下帯にかけて最も普通に分布する。

そ の 他：有明海沿岸で食用として利用されている。かつては浦安周辺などでも食用とされていた。

## ダイコンイソギンチャク

(ウメボシイソギンチャク科)

*Paracondylactis sinensis sensu Uchida & Soyama, 2001*

(Actiniidae)



大 き さ：体長約 20 cm

特 徴：体は著しく伸長する。体表面は滑らかで異物を付けていない。砂泥中に埋まって生活しており、触手環だけを底質上に開く。

生息環境：砂質干潟の潮間帯に生息する。

そ の 他：かなり大型の種であるものの、日中の明るいときには砂に潜っていることが多く、なかなか見つけられない。

## フトウデイソギンチャク

(ウメボシイソギンチャク科)

*Macrodactyla aspera* sensu Uchida & Soyama, 2001

(Actiniidae)

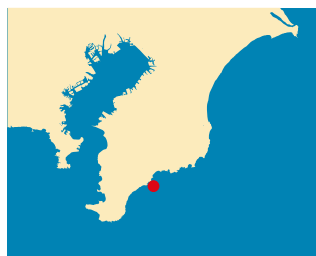


大 き さ：触手冠径約 20 cm

特 徴：触手は太く、大型の刺胞が詰まった部位が散在するためざらついて見える。スナイソギンチャクに似るが、本種は体に吸着疣を持つ。

生息環境：岩礁域水深約 10 m 以深。砂中の岩盤に付着し、触手環を底質状に拡げ、本体は埋まっている。

そ の 他：刺胞は強く、刺されると痛い。カクレエビの仲間などの生息場所となることがある。



## スナイソギンチャク

(ウメボシイソギンチャク科)

*Dofleinia armata* Wassilieff, 1908

(Actiniidae)



大 き さ：触手冠径約 30 cm

特 徴：前種と同様、触手に刺胞の詰まった部位があり、ざらついて見える。前種より触手は細く、体壁にイボなどの突起物は無い。

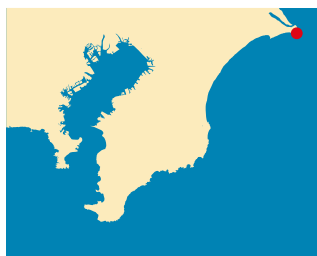
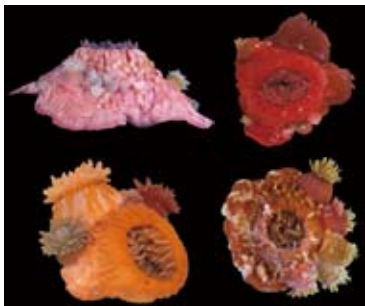
生息環境：水深 10 m 以深の岩礁域周辺の砂地や小石混じりの砂底。小型個体は岩場の割れ目などに生息していることもある(写真中央)。

そ の 他：色彩変異が著しい。人を強く刺す。前種同様カクレエビの仲間などの生息場所となることがある。





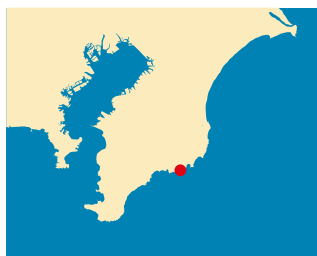
**コモチイソギンチャク**  
 (ウメボシイソギンチャク科)  
*Cnidopus japonicus* Verrill, 1869  
 (Actiniidae)



- 大 き さ：足盤径約 3 cm  
 特 徴：体に比較的大きな突起を多数持つ。潮が引いて体がしぼむと薄くなる。体に多数の子どもを付けているのが見られ、和名の由来となっている。  
 生息環境：岩礁域の潮間帯。比較的波あたりの強い場所に多い。北方種であり、千葉県では銚子周辺のみ分布する。  
 そ の 他：非常に色彩変異に富む。

**アンズイソギンチャク?**  
 (ウメボシイソギンチャク科)

*Aulactinia coccinea sensu Uchida & Soyama, 2001?*  
 (Actiniidae)



- 大 き さ：足盤径約 3 cm  
 特 徴：体は軟らかく、不明瞭な突起が散在する。体の色は、薄い茶褐色から黄緑色を呈し、縦に複数の白帯が走る。  
 生息環境：岩礁域の水深約 15 m 前後。岩の割れ目深くに付着。  
 そ の 他：千葉県での採集は 1 例しか確認していない。房総半島周辺では、他に静岡県下田沖などでも採集された。色彩などの特徴がアンズイソギンチャクとされる種に似るが、詳細は不明。

## ニチリンイソギンチャク

(ニチリンイソギンチャク科)

*Phymanthus muscosus sensu Uchida & Soyama, 2001*

(Phymanthidae)



大 き さ：触手冠径約 15 cm

特 徴：触手の両側面に多数の房状突起が並ぶ。また

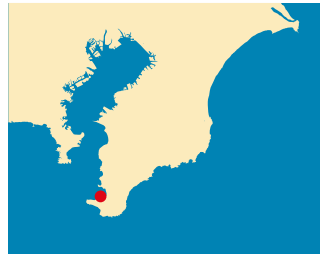
口盤上にイボ状の触手を持つ。体上部には吸

生息環境：着疣が多数ある。褐虫藻を持つ。

岩礁域の潮下帯。岩の割れ目深くなどに付着

そ の 他：し、触手環を拡げている。

南方系の種であり、千葉県では比較的個体数が少ないものと思われる。



## サンゴイソギンチャク

(ハタゴイソギンチャク科)

*Entacmaea quadricolor* Rüppel & Leuckart, 1828

(Stichodactylidae)



大 き さ：触手冠径約 20 cm

特 徴：体はなめらかで突起物はない。触手は緑色から

茶色を呈する。触手は細長くなったり写真左の

ように膨らんだり形を変える。褐虫藻を持つ。

生息環境：岩礁域の潮間帯下部から水深 30 m 程度まで。

岩の割れ目深くに付着し、体を著しく伸長させる。

そ の 他：クマノミやカクレエビの仲間など、さまざまな生

物の生息場所となっている。縦分裂で良く増えるため、大きな群落を形成することがある。分類は科の所属を含め見直しが必要。

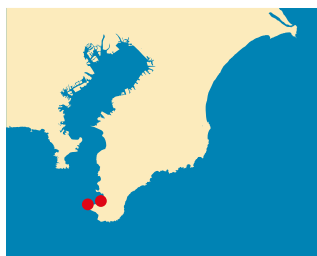


## キッカイソギンチャク

(ハタゴイソギンチャク科)

*Antheopsis koseirensis sensu Uchida & Soyama, 2001*

(Stichodactylidae)



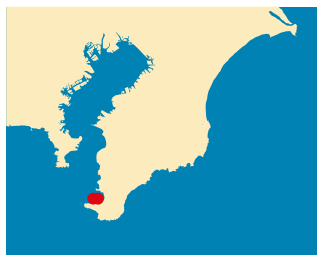
- 大 き さ：触手冠径約 20 cm  
特 徴：一見サンゴイソギンチャクにも似るが、吸着疣があるので区別が付く。触手は口盤の中心部まで均等に配置される。褐虫藻を持つ。  
生息環境：岩礁域の水深約 3 m 以深。岩のくぼみや割れ目などに付着している。  
そ の 他：触手の色は変異がある。カクレエビの仲間などの生息場所となる。分類は混乱しており、再検討が必要。*Antheopsis*属は、実際にはウメボシイソギンチャク科の属とされている。

## シマキッカイソギンチャク

(ハタゴイソギンチャク科)

*Antheopsis maculata sensu Uchida & Soyama, 2001*

(Stichodactylidae)



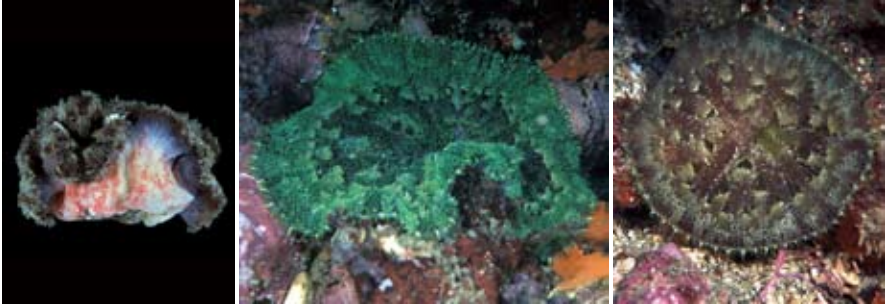
- 大 き さ：触手冠径約 20 cm  
特 徴：前種によく似るが、触手に複数のくびれがあり、横に白帯を持つことから識別される。前種同様吸着疣を持ち、小石や貝殻片などの異物を付着させる。褐虫藻を持つ。  
生息環境：岩礁域の水深約 3 m 以深。岩のくぼみや割れ目などに付着している。  
そ の 他：前種同様、カクレエビの仲間などに棲みかとして利用されることが多い。前種と同様、分類の見直しが必要。

## ゲビジンイソギンチャク

(ハタゴイソギンチャク科)

*Stichodactyla tapetum sensu Uchida & Soyama, 2001*

(Stichodactylidae)

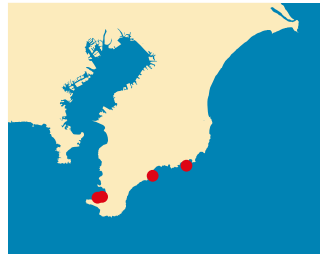


大 き さ：触手冠径約 15 cm

特 徴：口盤上に無数の短いイボ状の触手が並んでいる。外縁には短い通常の触手が配列している。触手の粘着力は強い。褐虫藻を持つ。

生息環境：岩礁域潮下帯から水深約 20 m 前後まで。

そ の 他：口盤・触手の色は一様に赤茶色や緑色の個体、ピンク・白・茶などが斑模様になる個体など、変異に富む。



## ヤドカリコテイソギンチャク

(セトモノイソギンチャク科)

*Pycanthus paguri sensu Uchida & Soyama, 2001*

(Actinostolidae)

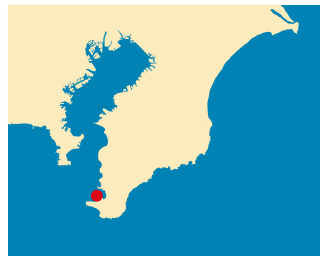


大 き さ：足盤径約 5 mm

特 徴：トゲツノヤドカリのハサミ(鋏脚)に付着している。体はなめらかで、隔膜に沿うように縦縞が走る。

生息環境：上記ヤドカリの鋏脚以外から見つかることはない。このヤドカリは、砂地の水深約 20 m 以深に生息する。

そ の 他：ヤドカリが貝殻に逃げ込むと、ちょうどイソギンチャクが貝殻の入り口に蓋をするような格好になる。





## ウスアカイソギンチャク

(ウスアカイソギンチャク科)

*Nemanthus nitidus* (Wassilieff, 1908)

(Nemanthidae)



大 き さ：触手冠径約 5 cm

特 徴：触手の色は常に白いが、体の色は黒、暗褐色からウスアカ色、黄色、白などさまざま。斑紋を持つものや持たないものがある。

生息環境：岩礁域の水深 15 m から100 m 前後まで。多くの場合ヤギ類の枝上に群生するが、写真左のように、岩盤上に群生することもある。

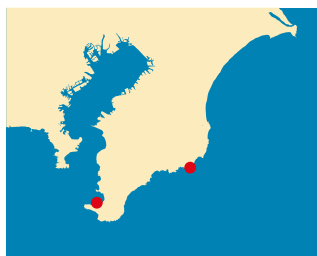
そ の 他：この種の梨地模様のを別種とする説もある。

## イワホリイソギンチャクの仲間

(マミレイソギンチャク科)

*Telmatactis* sp.

(Isophelliidae)



大 き さ：足盤径約 3 cm

特 徴：体は泥状の皮膜で覆われている。触手は太く、先端が膨らむ。触手の色・模様はさまざま。

生息環境：岩礁域の潮間帯下部から水深 10 m 前後まで。岩の割れ目や大きな岩の下などに付着する。

そ の 他：皮膚の弱いところを刺されると非常に痛い。体を傷つけると、無数の槍糸とよばれる刺胞の詰まった糸が出てくる。稀にイソギンチャクヤドリガイが寄生している(写真右)。

**ヤドカリイソギンチャク**  
 (クビカザリイソギンチャク科)  
*Calliactis japonica* Carlgren, 1928  
 (Hormathiidae)



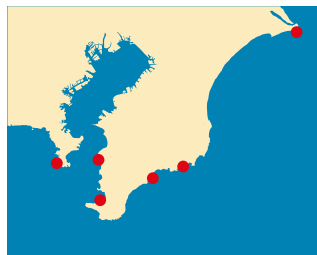
- 大 き さ：触手冠径約 10 cm  
 特 徴：体は非常に硬い。肌色地に赤褐色の斑紋が密に配さる。下部には槍糸を出す穴(槍孔)が並んでいる。  
 生息環境：岩礁域の水深 20 m から 100 m 前後。ケスジヤドカリなどの背負う貝殻上に通常1個体から2個体程度が付着している。  
 そ の 他：どのように増えるのか？ など生態には謎が多い。



**ベニヒモイソギンチャク**  
 (クビカザリイソギンチャク科)  
*Calliactis polypus sensu* Uchida & Soyama, 2001  
 (Hormathiidae)



- 大 き さ：足盤径約 4 cm  
 特 徴：体は茶褐色のベースに不規則な白やピンクの模様が入る。体の下側の槍孔からは和名の由来である紅色の槍糸を出し、タコなどの外敵からヤドカリを守っている。  
 生息環境：岩礁域水深約 5 m 以深。日中は転石下などに隠れている。イボアシヤドカリやソメンヤドカリなどの背負う貝殻上に数個体付着している。  
 そ の 他：イセエビ漁などで混獲されることが多い。

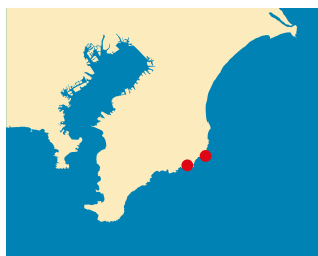


## クロホシイソギンチャク

(ナゲナワイソギンチャク科)

*Actinothoe nigropunctata sensu Uchida & Soyama, 2001*

(Sagartiidae)



- 大 き さ：足盤径約 15 mm  
特 徴：体の色は茶褐色から赤褐色。槍糸を出す槍孔が黒色を呈し、体に黒い斑点が散在するように見える。  
生息環境：岩礁域潮間帯。岩棚の下面や転石下に生息する。  
そ の 他：体は柔らかく切れやすい。

## モンバンイソギンチャク

(ナゲナワイソギンチャク科)

*Verrillactis paguri sensu England, 1971*

(Sagartiidae)

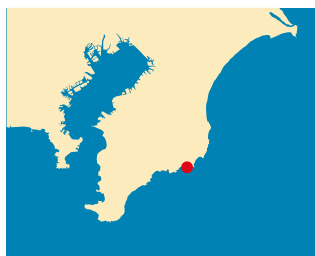


- 大 き さ：足盤径約 15 mm  
特 徴：体は付着面に薄く広く付着している。体の上端の触手の付け根付近がオレンジ色を呈することが多い。  
生息環境：岩礁域約水深 5 m 以深。ベニヒモイソギンチャクなどと共に、ヤドカリの背負う貝殻に付くが、特に殻口付近に集中する。  
そ の 他：足の一部が切れ、その切れ端が新たな個体になるという方法で無性的に増える。分類学的研究は進んでいない。

**カニイソギンチャク**  
 (ナゲナワイソギンチャク科)  
*Carcinactis ichikawai* Uchida, 1960  
 (Sagartiidae)



- 大 き さ：足盤径約 15 mm  
 特 徴：外見はモンバンイソギンチャクによく似る。  
 生息環境：岩礁域～砂地の水深 5 m 以深の浅所。  
 そ の 他：サメハダヘイケガニの背負う二枚貝殻上から採集されたことでこの和名があるが、他の甲殻類とも同様の関係が知られる他、岩盤や砂地の固形物上にも付着している。房総半島では岩盤に付着していることが多い。



**ヒダベリイソギンチャク**  
 (ヒダベリイソギンチャク科)  
*Metridium senile* (Linnaeus, 1761)  
 (Metridiidae)



- 大 き さ：足盤径約 4 cm  
 特 徴：体は黄褐色から赤褐色。触手は細く本数がとても多い。大型個体は口盤が襞状になるが、浅いところに生息する小型個体では襞は顕著でない。  
 生息環境：岩礁域の潮間帯から潮下帯の岩盤上。  
 そ の 他：北方種であり、千葉県では銚子のみで見られる。本来かなり深いところまで生息するが、房総半島では潮間帯の分布しか調べられていない。分類については若干混乱が見られ、今後の検討が必要である。





## チギレイソギンチャク

(タテジマイソギンチャク科)

*Aiptasiomorpha minuta sensu Uchida & Soyama, 2001*

(Diadumenidae)



- 大 き さ： 足盤径約 1 cm  
特 徴： 体は半透明の白色から暗緑色で内部が透けて見える。体には縦縞があるものあり、タテジマイソギンチャクにやや似る。
- 生 息 環 境： 波あたりの弱い港湾、干潟などの潮間帯から浅所。干潟ではカキ殻などに付着していることが多い。
- そ の 他： 足盤の切れ端から新たな個体を生じ、時に密な大集団を形成する。セイタカイソギンチャク同種とされることがある。

## タテジマイソギンチャク

(タテジマイソギンチャク科)

*Diadumene lineata* (Verrill, 1869)

(Diadumenidae)

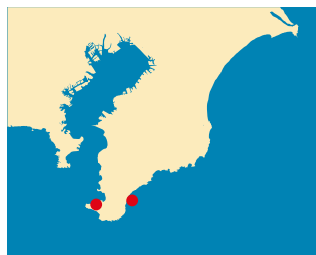


- 大 き さ： 足盤径約 1 cm  
特 徴： 体は緑褐色から茶褐色。縦縞が細いオレンジのもの、太く白いもの、両者を合わせたもの、かすり模様のあるもの、無地のものなどがあり、かならずしも縦縞を持つわけではない。
- 生 息 環 境： 干潟や港湾内、岩礁域などの潮間帯に広く分布。
- そ の 他： キャッチ触手と呼ばれる触手(写真右の太い触手)を用いてなわばり争いをする。前種と同様無性生殖を行う。

## 不明種 1



- 大 き さ： 触手冠径約 3 cm  
特 徴： 体は半透明の白色から肌色を呈し、水中では多少とも青白く見える。刺胞が集中している部分が白い斑点状に見える。足盤は小さく付着力が弱い。体は著しく伸長する。触手環を閉じることはない。
- 生 息 環 境： 岩礁域水深 2 m 以深の浅所。主に転石の下に生息している。
- そ の 他： 房総半島以外でも同様の特徴を持つ個体が得られている。未記載種の可能性が高い。



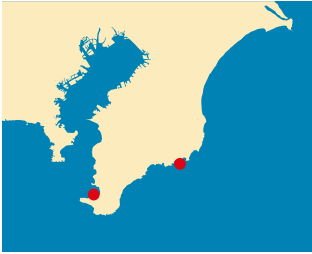
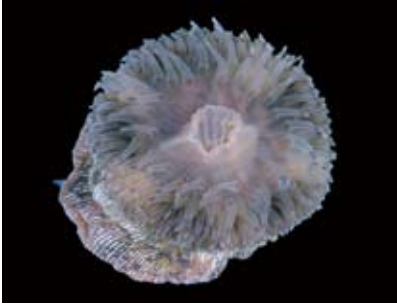
## 不明種 2



- 大 き さ： 触手冠約 5 mm  
特 徴： ヒメキンチャクガニのハサミ(鋏脚)に挟まれて  
いる。
- 生 息 環 境： 潮下帯から浅海の岩礁域。
- そ の 他： イソギンチャクを挟んで持ち歩くキンチャクガニの仲間は、熱帯から亜熱帯にかけて分布する。このうちヒメキンチャクガニのみが房総半島周辺まで生息している。ヒメキンチャクガニは周辺環境に生息する複数種のイソギンチャクを利用しているようであり、本種もそれらの何れかに該当する可能性がある。



### 不明種 3



- 大 き さ： 足盤径約 4 cm  
特 徴： 体は柔らかく、縦方向に白い部分、灰色の部分に塗り分けられており、その上に細いオレンジ色のラインが無数に走る。
- 生 息 環 境： 岩礁域水深 5 m 以深の浅所。イボアシヤドカリなどに背負われた貝殻上にベニヒモイソギンチャクと共に付着していることがある。ベニヒモイソギンチャクにやや似るが、槍糸を出す孔が体壁下端に小さく開口する。未記載種である可能性が高い。
- そ の 他：

### 不明種 4



- 大 き さ： 足盤径約 5 cm  
特 徴： 体は濃いオレンジ色を呈する。体表はなめらかだが、上部は不明瞭な突起状構造物が縦に配列し、その最上端は房状に膨らむ。
- 生 息 環 境： 砂底または砂泥底の浅所。砂に埋まっているものと考えられる。付着基部がどのようになっているかは不明。
- そ の 他： 銚子周辺から九十九里沖の小型底曳網で採集され、銚子では「しんご」と呼ばれ釣餌として売買されている。東京湾小柴沖のシャコ網漁で混獲されるほか、瀬戸内海でも見つかっている。未記載種の可能性が高い。

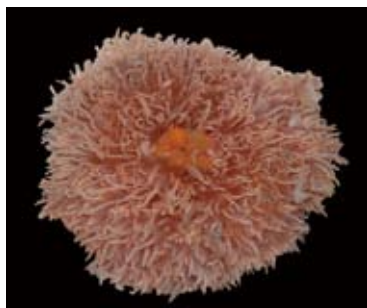
## ダーリアイソギンチャク

(ダーリアイソギンチャク科)

*Liponema brevicorne* (McMurrich, 1893)

(Liponematidae)

- 大 き さ：触手環径約 50 cm  
 特 徴：多数の触手が口盤一面を覆う。触手は根元に括約筋があり、これを収縮させることにより容易に脱落する。  
 生息環境：水深 400 m から1,000 m の深海。深海底の泥底状に転がっている。  
 そ の 他：房総半島では、外房沖合いの日本海溝へと続く大陸斜面で採集される。本種の分類にはやや混乱が見られ、今後の研究が必要である。



## ヒメキンカライソギンチャク

(科不明)

*Isadamsia* sp. J sensu Uchida & Soyama, 2001

(Family unknown)

- 大 き さ：足盤径約 3 cm  
 特 徴：体はなめらかで、上部および触手は赤味がかった肌色を呈する。  
 生息環境：生息環境：水深 250 m 前後。房総半島では、東京海底谷に産し、アカザエビ漁などに混獲される。  
 そ の 他：ジゴロウヤドカリの背負う貝殻上に着くが、自らの分泌物によってその殻を拡張させる。



## キンカライソギンチャク

(ウメボシイソギンチャク科)

*Stylobates* sp.

(Actiniidae)

- 大 き さ：触手冠径約 8 cm  
 特 徴：体は半透明のピンクがかった肌色を呈し、突起物などはなくなめらか。体はとても薄く、内部が透けて見える。  
 生息環境：水深約 500 m 前後の大陸斜面。  
 そ の 他：オキヤドカリの入った巻き貝様の殻を完全に包み込む。この金色の殻(写真上)は、前種と同様に、自らの分泌物によって作られている。未記載種の可能性が高い。





## ドフラインイソギンチャク

(エクソコエラクティス科)

*Exocoelactis actinostoloides* (Wassilieff, 1908)

( Exocoelactidae )

大 き さ： 口盤径約 15 cm  
特 徴： 体は薄く、よく伸長しているときには中がやや透けて見える。肌色からピンク色を呈する。口盤にはオレンジ色の放射状の模様がある。

生息環境： 水深 100 m 以深の岩盤上。  
そ の 他： 永らく正体不明のイソギンチャクであったが、2015年に再発見され、新たに和名「ドフラインイソギンチャク」がつけられた。相模湾、東京湾のほか駿河湾等、日本近海に広く分布するようである。



## クビカザリイソギンチャク

(クビカザリイソギンチャク科)

*Hormathia aff. digitata sensu Uchida & Soyama, 2001*

( Hormathiidae )

大 き さ： 足盤径約 15 mm  
特 徴： 体は泥様の皮膜に覆われており、上端に近いところを顕著な突起物を取り巻く。口盤は茶褐色で隔膜の配列に沿って白い放射状の模様が走る。

生息環境： 水深数百メートルの生きた巻き貝上に付着している。

そ の 他： 房総半島では、東京海底谷にて採集される。



## セトモノイソギンチャク

(セトモノイソギンチャク科)

*Actinostlora carlgreni* Wassilieff, 1908

( Actinostolidae )

大 き さ： 足盤径約 15 cm  
特 徴： 体、触手ともオレンジ色を呈するが、体のオレンジ色の部分は剥がれやすく、採集時の状態によっては下地の白色を呈する。体は硬い。触手の反口側が肥厚し、やや白っぽく見える。

生息環境： 水深 200 m 以深。  
そ の 他： 房総半島では外房沖の大陸斜面水深約 500 m から得られている。



\* 写真は相模湾産の個体。

## 不明種 5

- 大 き さ： 足盤径約 3 cm  
特 徴： 体は泥の皮膜に覆われており、不明瞭な突起が散在する。皮膜の下は白い。口のまわりは濃いオレンジ色を呈し、触手は半透明。
- 生息環境： 水深 500 m 前後の岩盤上。  
そ の 他： 房総半島周辺では、東京海底谷で見つかる。泥の皮膜は剥がれやすく、網などで採集される際には、皮膜が剥がれ、真っ白なイソギンチャクのように見えることが多い。未記載種の可能性が高い。



## 不明種 6 ( *Bolocera* sp. ? )

- 大 き さ： 足盤径約 15 cm  
特 徴： 体は白く突起物はない。触手はやや赤みがかった褐色で、内側の触手が外側の触手より長い。触手は基部の括約筋により容易に脱落する。
- 生息環境： 水深 500 m 以深の大陸斜面。付着基盤は不明。  
そ の 他： 形態学的特徴から *Bolocera* 属の一種と思われるが、従来本邦周辺海域から本属の種の記録はなく、未記載種の可能性がある。



## 不明種 7

- 大 き さ： 足盤径約 3 cm  
特 徴： 体は一様にオレンジ色でやわらかく、突起物などはないが、上端のみ多少こぶ状になっている。
- 生息環境： 水深数百メートルの泥底。エゾバイの仲間やヒタチオビの仲間などの、生きた巻き貝の殻の上に1個体から数個体が付着している。
- そ の 他： 房総半島周辺では、東京海底谷から採集されている。未記載種の可能性がある。



# 参考図書

内田紘臣・楚山勇. 2001.

イソギンチャクガイドブック. TBSブリタニカ

岡田要(編著). 1965.

新日本動物図鑑[上]. 北隆館. (入手困難)

西村三郎(編著). 1992.

原色検索日本海岸動物図鑑I. 保育社. (入手困難)

日高敏隆(監). 1997

日本動物大百科7 無脊椎動物. 平凡社.

柳 研介. 2004.

平成16年度マリンサイエンスギャラリー ～水中に咲く花～イソギンチャクの世界. 展示解説書. 千葉県立中央博物館分館海の博物館(当館ホームページよりダウンロード可)

日本付着生物学会編. 2017.

新・付着生物研究法 恒星者厚生閣.

## 写真撮影

立川浩之: 9ページ下段右, 19ページ上段左, 25ページ上段右

柳 研介: 上記以外

## イラストの一部

高山順子

\* 野外写真の撮影地は全て千葉県内。標本写真に使用されている標本はセトモノイソギンチャク(p. 29)を除き、全て千葉県で採集されたものです。

## 海の生きもの観察ノート6

# イソギンチャクを観察しよう

2007年(平成19年)3月31日初版発行

2019年(平成31年)3月31日第二版発行

編集・執筆 柳 研介(千葉県立中央博物館分館海の博物館)

発行 千葉県立中央博物館分館海の博物館

〒299-5242 千葉県勝浦市吉尾123

電話 0470-76-1133(代)

URL <http://www.chiba-muse.or.jp/UMIHAKU/index.htm>

(本紙掲載内容の無断転載は固くお断りします)

# CHIBA

